令和6年度小松市立国府中学校　学校評価　１（年度末）

めざす児童生徒像

・互いを認め、尊重し合い、互いに高め合う生徒
・意欲を持ち、主体的・協同的に活動する生徒
・互いの考えを、正しく伝えあい、聴き合える生徒
・集団の規律やマナーを守り、場に応じた行動ができる生徒
・健康や体力増進に努め、心身ともに健やかな生徒

※児童生徒結果－教員結果･保護者結果

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		中間 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）			①②の教員アンケート結果が９０％以上になる。	①	学級会、kokuhuトーク、国府の集いの定例化など、主体的・対話的な活動の充実を図っている。	100%				100%				・生徒同士が関わり合いながら学級会やＫＯＫＵＦＵトークなどの対話的な活動を行っている。それにより自主性や対話する力、自己開示力が高まっている。 ・個々の考える場を設定し、自己決定を大切にした取組を展開している。 ・積極的に何か展開していこうという取り組みが学校の雰囲気を良くしている。	・学級会活動における課題の設定や内容について検討する必要がある。 ・生徒が必要としているかの観点で見直していくことが大事ではないか。 ・学年によってやることを変えるなど工夫すると良い。
				②	授業を含め様々な教育活動の中で、生徒指導の４つの視点を生かした取り組みを実践している。	100%				100%					
				集計											

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目										達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善		働き方改革や業務の改善に向けて意識し、各項目の結果が９０％以上になる。	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	92%				100%				・互いに声を掛け合いながら実践できているが、仕事の整理や効率、要領という点でまだまだ改善の余地があると感じる。	・勤務時間内の仕事を充実させ、タイムパフォーマンスを意識した働き方を追求していく必要がある。 ・役割分担をする。自分の仕事を全うする。ＩＣＴ機器を使える人材を増やす。 ・バランスや優先順位を考え、本当に必要な業務なのかを考える。
				②	学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	100%				92%					

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	**①②の教員アンケート結果が90％以上になる。**	①	研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	100%				100%				・単元マップや指導計画によって、見通しをもって計画的に授業を構想することができている。 ・今年度の重点である「生徒が自ら深める活動」や、「生徒に委ねる」という部分については、やってはいるが具体性が少なく、さらに工夫が必要である。 ・授業研究では、全教員でアイディアを出し合った研究授業や、重点について検討を重ねた教科部会など、毎回充実した校内研修を行うことができた。特に、研究授業については、「みんなで作った授業」という意識が生まれ、よかった。	・引き続き、目指す姿の実現のため、基礎となる各教科の力の定着を意識していく。そのうえで、より具体的な取り組みを設定し、共通実践していく。 ・GIGAと連携し、紹介だけでなく実際の授業での活用場面や実践の交流などを通して、「使える」「生かせる」ことを目指す。 ・一年間取り組んできたことが、本当に有益であったかの検証が不足しており、その方法を早急に考える必要がある。
				②	授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100%				100%					
				集計											
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①②の教員アンケート、生徒アンケート結果が８０％以上になる。	①	児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	100%	91%		-0.09	100%	91%		-0.09	・生徒の授業に向かう姿勢は積極的で、自分たちでよく話し合いながら、課題解決に向けて取り組んでいる。教員の側の感覚だけでなく、生徒の実感としても、アンケートの②④の項目の数値が上がっており、自分の考えを持ち、相手に伝え、相手の考えを聞いて学ぶという「話し合い」ができていると言える。 ・教員の、「振り返り」や生徒の「学び」に対する意識が高まる一方で、生徒の実感が伴っていない（⑤の項目）。 ・ICT機器の活用については、どの教科、どの学年・学級でも、課題解決に向けた効果的な活用がされており、生徒もその有用性を実感している。（⑥の項目） ・「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」や「自由進度学習」など、個々の教員が関心を持って自ら取り入れている取り組みもある。	・話し合いの中で、取り残される生徒のいないよう気を付けながら、「考えたい」「聞いてみたい」と感じる課題設定の工夫をする。 ・「深い学び」になっているのか、その検証にふさわしい「振り返り」や評価方法を検討する一方で、学びや変容を生徒と共有することで、生徒も実感を持てるようにする。 ・個々の教員の感じている課題や、関心のある他校の取り組みや実践について、共有する機会を設け、研究主題や重点による「目指す生徒の姿」は共有しながらも、教員も「学び」や「深まり」、「成長」を感じられるような学校研究にしていきたい。
				②	児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。	100%	95%		-0.05	100%	97%		-0.03		
				③	児童生徒は、自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表している。	92%	89%		-0.03	92%	88%		-0.04		
				④	児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	100%	95%		-0.05	100%	98%		-0.02		
				⑤	児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり，学びに対する達成感を得られたりしている。	85%	86%		0.01	100%	89%		-0.11		
				⑥	児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	100%	92%		-0.08	100%	100%		0		
				集計											
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	②の項目の教員アンケート結果が９０％以上になる。	①	指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	92%				92%				①②学年の枠を超えて、先生方がコミュニケーションを行い、意見交換がなされている。中でも総合的な学習の時間を柱として、各学年の実情に合わせた取組を行うことができた。 ③全国・県基礎学力調査の結果を受けて、２学期には定期テストにて評価問題を作成、実施を行った。それを受けて、各教科で分析を行い、本校の課題克服に向けて授業改善を進めることができた。 ④一学期は新入生の授業参観と情報交換を行った。二学期には中学校の特別活動を小学校の先生が見学し、その後の研修会（杉田先生の講演会）にも参加した。また教育会において情報交換を進める等、小中連携を進めることができた。	①②③親和的な職員室風土のもと、学校研究部より示された重点取り組みの実践を、今後も全教科で意識して行う。さらに、学力向上においては、分析結果をもとに全職員で共通実践できるよう、教科部会などをより充実させる。 校内研修会等の充実により全職員が納得の上に取り組めるようなPDCAを推進する。 ３学期に全職員が参加し、次年度に向けて学校の課題を共通確認する取組（学校研究や学校力向上ロードマップ、カリキュラムマップなどのふり返り）を計画している。 ④職員会などで教科横断的な取組や小中連携などで行った取組・情報など共有する場を設ける。
				②	児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立している。	100%				100%					
				③	全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	92%				85%					
				④	校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	78%				50%					
				集計											
		家庭学習	②の項目の教員アンケート結果が９０％以上になる。	①	家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	64%	70%	65%	0.06	85%	74%	72%	-0.11	家庭学習方法や課題、学習用端末を活用した取組については、学年ごとの実情に合わせた工夫をおこなっている。ただ、３年生以外の学習時間が比較的少ないことが昨年に引き続き課題となっている。	自学や各教科の課題の在り方や必要性について検討していく必要がある。学習用端末については、自分の生活習慣をデザインしていく一つのツールとしての活用方法を模索していきたい。そのため、 学習用端末を学校保管ではなく、毎日の持ち帰ることも視野に入れて検討する必要がある。
				②	学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	85%	66%	61%	-0.19	78%	46%	56%	-0.32		
				集計											